

歌 詞 大 意

「子供の不思議な角笛」より

死んだ鼓手

朝の3時から4時の間
僕ら兵隊は行進をしなくちゃならない
あの小道を行ったり来たり
トラッラリ トララライ トララレラ
僕の恋人が見下ろしている

ああ兄弟よ 今 僕は撃たれた
弾にあたり重傷だ
兵舎まで僕を運んでいってくれ
トラッラリ トララライ トララレラ
それはここから遠くはないから

ああ兄弟よ 僕はおまえを運べない
敵が僕らを打ち負かしたんだ
神様だけが助けてくれるさ
トラッラリ トララライ トララレラ
僕は死ぬまで
行進しなくちゃいけないんだ

ああ兄弟よ
おまえたちは通り過ぎていくのか
まるで僕がおしまいかのように
トラッラリ トララライ トララレラ
おまえたちは僕に近寄りすぎる

僕は太鼓を鳴らさなくちゃいけない
トラッラリ トララライ トラッラリ
トララライ
そうでないと僕までも負けてしまう
トラッラリ トララライ トラララ
兄弟たちは刈り取られた麦のように
大地にいっぱい横たわっている

彼は太鼓を打ち鳴らし
静かな兄弟たちを起こす
トラッラリ トララライ トラッラリ
トララライ
彼らは敵を打ち負かす
トラッラリ トララライ トラッラレ
ララライ
恐怖が敵を打ち負かす

彼は再び野営の前に来た
トラッラリ トララライ トラッラリ
トララライ

彼らは明るい小道に入ってきた
彼女の前をとおる
トラッラリ トララライ トラッラリ
トララライ トララレラ

朝になるとそこに死体が
列をなして立っている
墓石のように太鼓が先頭に立っている

ラインの伝説

私はネッカー川の近くで草を刈る
ライン川の近くでも草を刈る
恋人と一緒にの時も
独りの時もあるのです
鎌が良く切れなけりゃあ
草刈りの役にも立たないでしょう
恋人がいたとしても
そばにいないとなんにもならない
ネッカー川やライン川のそばで
草を刈る事になったら
私の黄金の指輪を
川に投げ入れてしましましょう
指輪はネッカー川を流れ
またラインに流れていきます
どんどん流れていって
海の底深くに沈んでいくでしょう

指輪は流れていき
お魚がそれを食べてしまいます
そのお魚はやがて王様の食卓に
置かれるでしょう
王様はお尋ねになる
この指輪は誰のものじゃ と
すると私の恋人は答えるのです
指輪は私のものでございます

恋人は山を登り 山を下り
美しい黄金の指輪を
私のところに持ってきます
ネッカー川やライン川のそばで
君が草を刈る時は
いつも指輪を川に投げ入れておくれ

高き知性への讃歌

昔 ある深い谷間で

カッコウとナイチンゲールが
歌競べをする事になりました
曲を歌い上手く歌った方が勝ちで
賞を得る事となった

カッコウが言った
もし良ければ私が審判を選ぼう
そうだロバに頼もう
彼なら二つ大きな耳を持ってぞ
良く聞こえ良く判断できるに違いない

二人は直ぐに審判のところに飛んでいき
事の次第を告げると
ロバはさあ歌い始めよ といった
ナイチンゲールは美しく歌った
ロバは言った
おまえはわしを混乱させる
イーヤ イーヤ
わしには耐えられん
カッコウは待ってましたとばかりに
3度 4度 5度の音程を歌い始めた
ロバは気に入っていった
よし よし わしの審判を言い渡すぞ

ナイチンゲールよ おまえは良く歌った
だがカッコウよ おまえのコラールは
拍子を崩さず歌い続け
わしの高き知性に訴えた
これは国一つ分に値する
よっておまえを勝ちとする

“ さすらう若人の歌 ”

愛しい^{ひと}女の結婚式の日
愛しい女の結婚式の日
楽しい結婚式の日は
僕には哀しい日である
僕は僕の部屋に籠もる
暗い部屋に
そして彼女の事を想い泣いた
愛しい彼女の事を想い泣いた

蒼い花よ！ 蒼い花よ！
萎れないでくれ！
優しい小鳥よ 優しい小鳥よ
おまえは緑の原で歌う
「ああ なんてこの世は美しいんだ
ツイキュー ツイキュー」 と

歌わないでくれ！
咲かないでくれ！
春はすでに終わってしまった
すべての歌も消えていった
僕はこの苦しみを想う

今朝 野原をあるいたとき
今朝 野原をとおっていった時
草の葉にはまだ露がおり
陽気そうなうそ鳥が語りかけてきた
「おはよう ねえ君
素敵な日になりそうじゃあないかい？
素晴らしい日に ツインク
この世はなんて素晴らしいんだろう」
野原に咲いている釣鐘草も
陽気に機嫌の良いところを見せている
鈴を鳴らしている 響け 響けと
朝の挨拶を呼びかけてきた
「素敵な日になりそうじゃあないかい？
クリン クリン 気持ちがいいなあ
この世はなんて素晴らしいんだろう
ハイヤー」

そして陽の光をあびて
この世がいっせいに燦めきはじめた
すべてが音と彩りをえた
陽の光をあびて
花も鳥も 大きいものも小さいものも
「おはよう！
素敵な日じゃあないかい？
ねえ そうだろう？
素敵な日だね！？」

そして僕も幸せになれるというのか！？
いや！ いや！ 僕は思う
僕には花が咲き誇ることはない！

灼熱のナイフを僕は持っている
灼熱のナイフを僕は持っている
胸の中に一本のナイフを
ああ なんて苦しい
それは深く突き刺さっている
すべての喜び すべての楽しみに
それは深くそして苦しく斬りつけている
ああ なんていう邪悪な客か
片時も休まず 片時も憩わない
昼間も 夜も
僕が眠っている時でさえ

ああ なんて苦しいことか

僕が天を仰ぐ時
そこに二つの青い瞳が見える！
ああ なんて苦しいことか！
僕が黄金色に輝いた野原を歩くと
遠くに金髪のはげが
風になびくのが見える！
ああなんて苦しいことか
僕が夢から醒めると
彼女銀のように響く笑い声が聞こえる
ああ なんて苦しいことか！
僕は黒い棺の中に横たわって
もう二度と目を開きたくはない！

彼女のふたつの青い瞳が

彼女のふたつの青い瞳が
僕を広い世界へと追いたてた
僕はすべての大好きな場所に
別れを告げなくてはならなかった！
ああ 青い瞳よ！
なぜ僕を見つめたのか？
永遠の悩みと傷ついた心だけが
僕には残った！

僕はひとり静かな夜の中を
暗い荒野をぬけて出て行った
別れの挨拶を僕に告げるものもなく！
さらば！ 僕の道連れは愛と悩みだけ！
道ばたに菩提樹が立っていた
そこで僕は初めて眠り休んだ！

菩提樹の木の下で
花びらが僕の身体の上に
まるで雪のようにふりかかった
僕は人生がどうであったか忘れていった
すべてが すべてがふたたび
素晴らしくなっていた
なにもかも！ 愛も悩みも
この世も 夢も すべて！

「大地の歌」より

告 別

太陽は山の彼方に隠れ
すべての谷に夕闇が近づいてきた
影はすべてを冷気で冷ます
見よ！ 白銀の小舟の如く
月は青い天井の海に浮かぶ
やわらかな風が吹くのを
松の暗い木陰のすみで感じる
暗闇に小川は心地よく流れの音を響かせ
花は黄昏にその色を失った
大地は憩いと眠りにゆっくりと息づき
すべての憧れがいま夢に浸る
疲れし人々は家路につき
眠りの中で忘れていた喜びと青春に
ふたたび出会う
鳥たちも静かにすみかにもどる
世界が眠りにつく

松の木陰に涼しい風が吹く
我はここにたたずみ友を待つ
彼に永遠の別れを告げんがため待つ
友よ！ 君の傍でこの夕陽の美しさ
とともに味わいたい
君はいずこに？
我をずっと独りにしている
しなやかにふくれる草の道を
我は琵琶を抱え彷徨っている
美しきかな！ 永遠の愛と
生に酔う世界よ！

オーケストラ間奏

友は馬をおり
そして別れの杯を彼に差し出した
彼は尋ねた いずこへ行くのか
そして何故そうせざるを得ないのか と
彼は答えた かすれた声で
友よ この世は私には恵まれなかった
何処に行くか 私は行く 山を彷徨い
私の孤独な心に安らぎを探すために
故郷を 終の棲家を探し彷徨う
二度と異郷を彷徨うことはない

静かに私の心は その時が来るのを待つ
大地も春となれば
花は咲き誇り 新緑は輝く
いずこでも遠くには青い光が
永遠に 永遠に……